=市史編さん便り=【16号】 令和4年6月23日(木)発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

明治8年(1875)「土佐紀行」の記述から（『中浜東一郎日記』冨山房、1991年）

―万次郎・東一郎父子の故郷への帰郷―

(1)はじめに

万次郎は、米国から帰国し、ゆっくりと故郷で生活することが許されず、土佐藩や幕府、薩摩藩等に招聘されて米国生活で学んだ知識を日本に伝えた。まさに時代の要請に応えて、八面六臂の活躍であった。

その忙しい合間を縫って、母の様子を見に何度か中浜村に帰省を重ねている。特に、印象深いのは、長男東一郎を連れて帰省した1875年（明治8）の帰省である。

(2)横浜まで汽車で、横浜から郵便船で神戸・大阪まで移動

1875年(明治8)7月9日、万次郎親子は新橋駅を出発した。中学校社会科(歴史的分野)では、日本で初めて鉄道が敷設されたのが新橋―横浜間であり、1972年(明治5)のことである。初めて乗車した鉄道に東一郎はさぞ驚いたことだろう。

横浜から郵便船で神戸港に、『中浜東一郎日記』（冨山房、1991年）（以下『日記』と記す）によると、親子は上等切符2枚を購入している。1枚10～15円であったことから、現在の貨幣価値に換算して20～30万円程度である。2人で計40～60万円にもなる。平たく言うと現在の海外旅行と同じような感覚であったと思われる。

東一郎は、郵便船での船酔いが酷く、食事も十分に取ることができなかった。特に、黒潮に逆流しての航海は波の抵抗も大きく、紀伊半島沖や室戸岬から紀伊水道に入る海域等では潮流が複雑に絡み合い上下の揺れが激しかったにちがいない。しかし、元来の船乗りであった父万次郎は、これを微動だにせず、平然としていた。

(3)三菱石炭船で高知港、その後も海路で中浜村へ

神戸から大阪に移動し、大阪見物を行う等、三日程船待ちし、三菱石炭積載船・平安丸に便乗し、高知に到着した。明治の初め頃は、まだ高知行きの旅客定期便がなく、旅行者等は物資輸送のための蒸気船に便乗するなどして航海していた。高知市の旧宅に9日間滞在し、海路で浦戸から下田へ、下田から漁船をチャーターして中浜村に到着した。明治8年(1875)7月26日、万次郎母「志ヲ」が子と孫の帰省に涙を流して喜んだ。地域の子どもたちが万次郎親子を物珍しそうに見物に集まったことが『日記』に記されている。

(4)万次郎と東一郎の帰省生活　―中浜村での様子―

万次郎親子は、明治8年（1875）7月26日から8月5日までの11日間、中浜村に帰省した。この間、万次郎は隣村・大浜浦の住吉神社の夏祭りの見物に行ったり、磯

釣りに行き、1メートルくらいのスズキを2匹釣りあげたりと故郷を満喫した。一方東一郎は親戚の男の子と川や海で小魚やエビを獲って楽しんだ。湯がいたトウモロコシや寒天を好んで食べていた。東一郎は時々退屈となり、故池道之助氏（万次郎の先輩であり、かつては従者をしていた）の未亡人に道之介所蔵の書籍を借りに屋敷に訪問した。東京で生活する東一郎にとって田舎の夜はさぞかし退屈だったことだろう。

（5）「再日不逢て」…母であり祖母である「志を」との永久の別れ

「八月五日　晴天、午後雨天、今朝類族に別れを告げ出立す。此の別哉、老祖母再日不逢て流涙別を惜む、小生は再会は近年の内に有ると曰て僅に慰め解船す。…」

（『日記』）

明治8年(1875)8月5日、朝、万次郎親子は、親戚に別れを告げ、故郷中浜村を後にした。そのとき、心に迫る描写がある。万次郎と東一郎が、母であり祖母である「志ヲ」との別れの場面である。「志ヲ」は「再日不逢て（生きて再び会うことはできないだろう）」と涙したと孫東一郎の眼から「志ヲ」の姿を捉えている。

高齢になると自分の命の時間をどうしても感じてしまう。これが万次郎や東一郎と最後の面会になるかもしれない。「志ヲ」はそのことを直感で感じ取っていたのだろう。実際この直感は的中し、これが最後の別れとなったのである。

（6）まとめ

私こと、亡き母の法事の時に、叔父伯母が「子どもや孫が同じ敷地に住んで、あんたの母は幸せやったと思う」と言ったことを思い出す。そういえば、叔父も叔母も自分の子どもたちは遠く県外で仕事し、そこで居を構え生活している。その点では、私の母は子が近くに居て、あるいは幸せだったのかもしれない。

首都圏や京阪神方面から遠く離れている土佐清水市域では、生活のため親子が離れ離れに生活しているパターンが多い。自分の寿命と親の寿命を重ね、盆正月に帰省する日数を数えた時、意外と親子が接する時間が少ないことに気づく。

母の亡くなる日の1か月程前の正月明け（母は2月初めに逝去した)、2人の孫がベッド脇で別れのあいさつをした時、母は泣いた。その声はいまだに私の耳朶を離れない。それはまるで万次郎・東一郎と志ヲとの別れの場面だった。そう感じた。ただただ無性に辛くて、遠くからその光景を見つめることしかできなかった。

【編集後記】

「市史編さん便り 13号」にて、7月3日(日)に愛媛県東温市の市民大学で万次郎について講話することを紹介しました。これに加え、新たに「土佐ジョン万の会総会（7月9日)」にて同じく万次郎に関しての講話を依頼されました。この夏は、万次郎尽くしの夏になりそうです（笑)。

同会の内田会長には万次郎関係行事で度々土佐清水市にも訪問いただいており、内容のある講話ができるように今勉強しているところです。万次郎は、学べば学ぶほど奥が深く、私たちが生きていくうえでの、いろいろな知恵と示唆を与えてくれることが多くあります。個人的には坂本龍馬にも匹敵し、もしかすると、それを凌駕するような存在ではないかと私は考えています。しっかりとした脚本さえあれば、十分「大河ドラマ」にも登場できる要素があると私は確信しています。(田村)